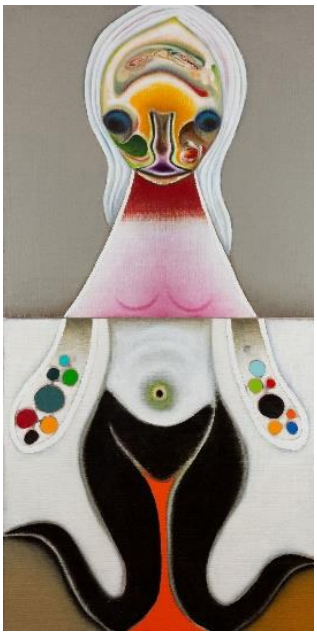


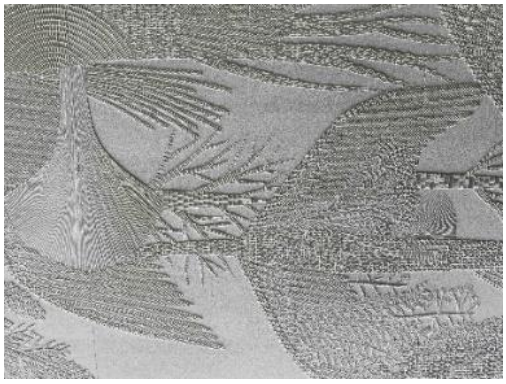
生命の庭

8人の現代作家が見つけた小宇宙

青木美歌
浅井裕介
加藤泉
康夏奈
小林正人
佐々木愛
志村信裕
山口啓介

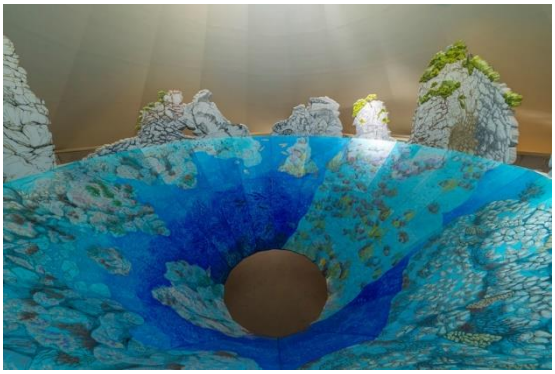
Garden of Life

Eight
Contemporary
Artists
Venture into Nature



2020年10月17日（土）
－2021年1月12日（火）

※新型コロナウィルス感染症拡大防止のため会期が変更となる場合があります。



TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

PRESS RELEASE Vol.1 2020.07

プレス関係各位

日頃より東京都庭園美術館をお引き立ていただき誠にありがとうございます。当館では2020年10月17日（土）～2021年1月12日（火）の会期で「生命の庭　8人の現代作家が見つけた小宇宙」展を開催いたします。この機会にぜひ貴媒体にてご紹介いただければ幸いです。

生命の庭　8人の現代作家が見つけた小宇宙

庭園に佇む邸宅で
わたしたちのなかにひそむ自然が甦る

私たちは、太古の昔にひとつの生命体として誕生して以来、刻々と変化する地球の過酷な環境に柔軟に適応することで進化を遂げ、高度な知性を獲得するに至りました。

その一方で、仮想現実に囲まれた日々の暮らしの中で、ともすれば自分たちが自然の一部であることさえ忘れがちです。

コロナ禍により、自然との新たな関わり方が求められている現在（いま）、私たちが本能的に有している感覚を取り戻す手段として、アートの役割が注目されています。意味や目的に縛られないアートは、私たち人間もまた、大きな生命の流れのなかにいることに気づかせてくれるからではないでしょうか。

本展は、緑豊かな自然に囲まれた旧朝香宮邸を舞台に、日本を代表する8人の現代作家たちの作品を通して、人間と自然との関係性を問い直す試みです。絵画、彫刻、映像、インスタレーションなど個性豊かな作品の数々は、私たちの意識の彼方にある世界の覆いをそっと外してみせてくれることでしょう。庭園の中に佇む小さな箱庭のようなこの邸宅で、私たちのなかにひそむ自然が甦る瞬間が到来するかもしれません。

参加作家

青木美歌、淺井裕介、加藤泉、康夏奈、小林正人、佐々木愛、志村信裕、山口啓介（50音順）

本展の見どころ

1　8人の作家とアール・デコの館・旧朝香宮邸との競演

本展の舞台となるアール・デコの館・旧朝香宮邸。周囲の自然と呼応し合うかのようなこの邸宅の中で、個性豊かな8人の作家たちは、どのような空間を作り上げるのでしょうか。乞うご期待。

2　多彩な関連プログラムを開催

山口啓介氏によるカセットプラントのプログラム、加藤泉氏が参加するバンドTHE TETORAPOTZのライブを開催予定。詳細は決まり次第、当館ウェブサイトに掲載します。

※いずれのイベントも新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、中止または変更となる可能性がございます。

TOKYO METROPOLITAN TEIEN ART MUSEUM

PRESS RELEASE Vol.1 2020.07

展覧会概要

展覧会タイトル　**生命の庭**　8人の現代作家が見つけた小宇宙

欧文タイトル　Garden of Life—Eight Contemporary Artists Venture into Nature

会　　期　2020年10月17日（土）– 2021年1月12日（火）

開館時間　10:00–18:00 （入館は17：30まで）

休 館 日　毎月第2・第4水曜日(10/28、11/11、25、12/9、23)
および年末年始（12/28-1/4）

会　　場　東京都庭園美術館　本館＋新館
〒108-0071　東京都港区白金台5–21–9

入 館 料　一般＝1000（800）円
大学生（専修・各種専門学校含む）＝800（640）円
中・高校生＝500（480）円／65歳以上＝500（480）円

※（ ）内は前売りおよび20名以上の団体料金。
※小学生以下および都内在住在学の中学生は無料。
※身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者二名は無料。
※教育活動として教師が引率する都内の小中・高校生および教師は無料（事前申請が必要）。
※第3水曜日（シルバーデー）は65歳以上の方は無料。
※記載の内容に変更が生じる場合がございます。ご来館の際は、当館ウェサイト等で最新の情報をご確認下さいますようお願いいたします。

URL　www.teien-art-museum.ne.jp

主　　催　公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館

年間協賛　戸田建設株式会社、ブルームバーグ・エル・ピー

協　　力　ムロマメ舎

アクセス

［目黒駅］
JR 山手線東口／東急目黒線正面口より徒歩7 分
［白金台駅］
都営三田線／東京メトロ南北線1 番出口より徒歩6 分
TEL. 050-5541-8600（ハローダイヤル）
03-3443-0201（代表）／ FAX. 03-3443-3228

広報用画像

各種広報用画像をご用意しています。高解像度データダウンロード専用URLをご案内いたしますので、ご希望の方はpress@teien-art-museum.ne.jpにご連絡下さい。

※ご使用時の注意とお願い
・写真使用の際はキャプション・クレジットの掲載を必ずお願いいたします。
・トリミング、文字載せは原則不可。二次使用は禁止いたします。
・使用の際は事実確認のため、記事校正を必ずさせていただきます。
・掲載紙又は、掲載記事を担当者までお送りください。

お問い合わせ先
東京都庭園美術館 広報担当：板谷、鶴　TEL. 03-3443-0201 Mail. press@teien-art-museum.ne.jp

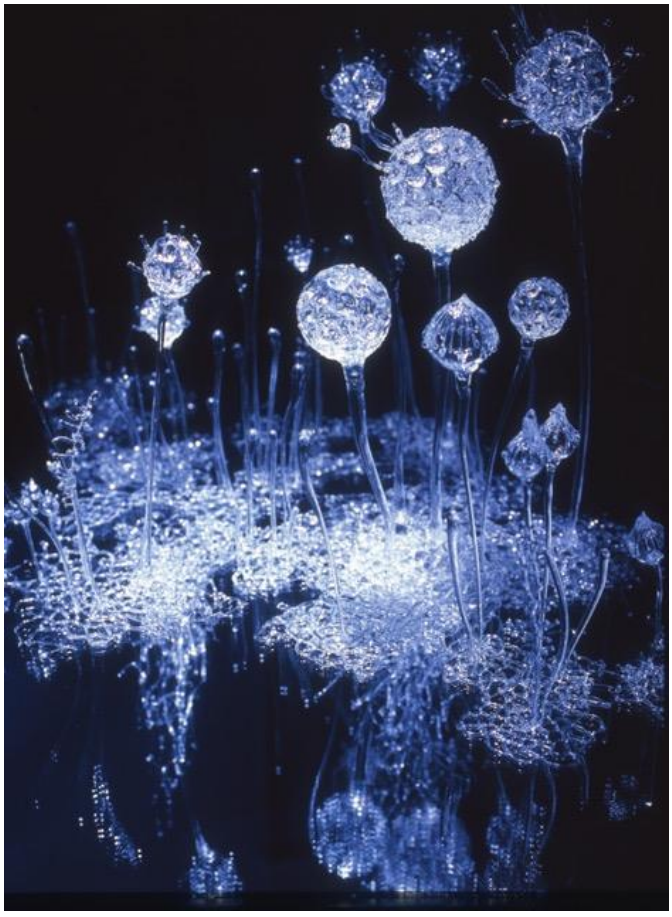
Follow us on Facebook, Twitter, Instagram @teienartmuseum

各作家について

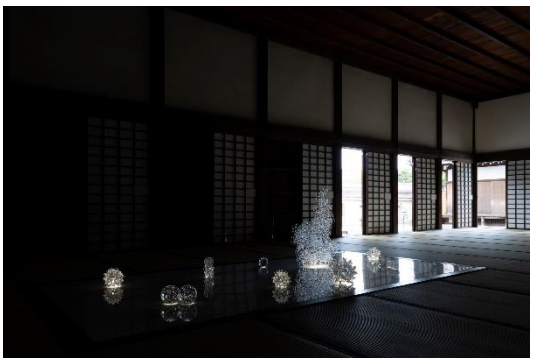
青木美歌｜Mika Aoki

1981年 東京都生まれ
武蔵野美術大学/工芸工業デザイン科ガラス専攻卒業
Royal College of Art / Ceramics and Glassコース修士課程修了
ポーラ美術振興財団在外研修生としてアイスランドにて研修

学部一年時に出会って以降、ガラスを通した不可視な世界との関係を問いながら制作を続けてきた。大学卒業後は文化庁新進芸術家海外研修制度にてイギリスへ留学し、修士号を取得。国内では2008年に第11回岡本太郎現代芸術賞展に入選した。「ある」のに「ない」ように感じるガラスの特性は、見えない世界だけではなく生命の循環をも映し出す。青木の扱う菌類、ウィルス、細胞といったミクロなモティーフは、目に見えるもの、見えないものその全てが相互に関連しあい変容しながら存在している生命の有りようを表現している。本展では旧朝香宮邸および新館ギャラリー２にて、新作インスタレーションを含む展示を行う。



青木美歌《あなたと私の間に》 2006
photo: Yusuke Sato



右すべて）青木美歌《煙庭》2019
「時を超える：美の基準」元離宮二条城での展示風景
photo: Yuto Hirakakiuchi
※同じ作品を別角度から撮影

各作家について

淺井裕介｜Yusuke Asai

1981年 東京都生まれ
1999年 神奈川県立上矢部高等学校 美術陶芸コースを卒業

植物をマスキングテープに耐水性マーカーで描く「マスキングプラント」や滞在場所で採取された水や土を使った巨大な「泥絵」、道路用の白線素材から動植物の形を切り出して、バーナーで焼き付ける「白線になった動物」シリーズで知られる。近年は、鹿の血を絵の具とした作品や油絵にも取り組んでいる。

淺井は動物、植物、宇宙など、人間と自然の関係から論じられることが多い。彼が得意とする動植物は画面に隙間なく併置され、大きな動物の中に入れ子状に小さな動物が現れ、ミクロの中にマクロが存在するこの宇宙の生態系を表していると。だが、正確には作品制作における自然は三つの異なるもの（素材、モティーフ、環境）から構成されている。それらの異なる自然へのアプローチが制作の中で積み重なり、一つの作品を成立させているのだ。本展では、自然からさらに「野生」へと関心を深める淺井の作品を展示する。

淺井裕介 Art Center Ongoing「淺井裕介　野生の星２」展展示風景　2019
©Yusuke Asai courtesy of the artist, Art Center Ongoing, ANOMALY

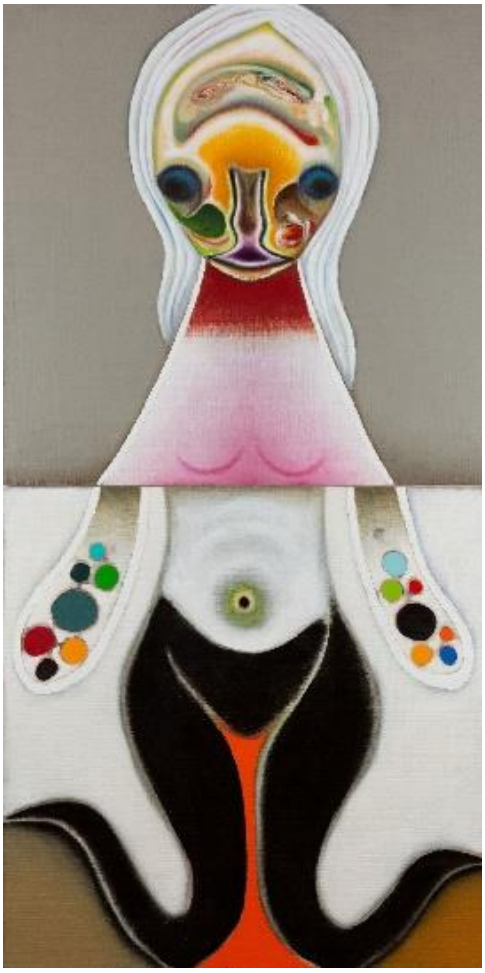
左）淺井裕介《野生の星》2019 photo: Ichiro Mishima courtesy of Art Center Ongoing, ANOMALY ©Yusuke Asai
中央）淺井裕介《空から大地が降ってくるぞ》 WULONG LANBA ART FESTIVAL 2019 展示風景 2019 ©Yusuke Asai courtesy of the artist, WULONG LANBA ART FESTIVAL 2019, ANOMALY 右）淺井裕介《yamatane》Rice University Art Galleryでの展示風景 2014 photo by Nash Baker ©Yusuke Asai courtesy of the artist, Rice University Art Gallery, Houston, Texas, ANOMALY

各作家について

加藤泉｜Izumi Kato

1969年 島根県生まれ
武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
近年は美術作家によるバンドTHE TETORAPOTZ（テトラポッツ）でも活動中

大学で油絵を学んだのち、数年のブランクを経て、建設現場で働きながら制作を再開した。胎児のような「人型」を描いた油彩画で注目され、2004年頃からは人型を模した彫刻制作にも着手しはじめた。2007年にはヴィネツィア・ビエンナーレ国際美術展に参加するなど、その活動は国際的なものとなった。制作の中心に絵画をおく加藤は、外的な世界のなかに置かれた途端、図として機能する彫刻の「自然な」存在感に対して、絵画は世界とは矩形に区切られることで「不自然な」在り方をすると述べている。人型とはその両者を行き交うための媒介者なのである。本展では、当館を舞台として、絵画、彫刻に収まらない多様な素材を用いた作品を展示する。



加藤泉《無題》2019 photo: Ringo Cheung
courtesy of Perrotin

上）加藤泉《無題》2019「CONTACT つなぐ・むすぶ 日本と世界のアート」清水寺（西門）京都 2019年での展示風景 photo: Kiyotoshi Takashima courtesy of The Contact / Connect Exhibition Executive Committee ©2019 Izumi Kato
左）加藤泉《無題》2019
photo: Kei Okano courtesy of the artist and Perrotin
右）加藤泉《無題》2019
photo: Kei Okano courtesy of the artist and Perrotin

各作家について

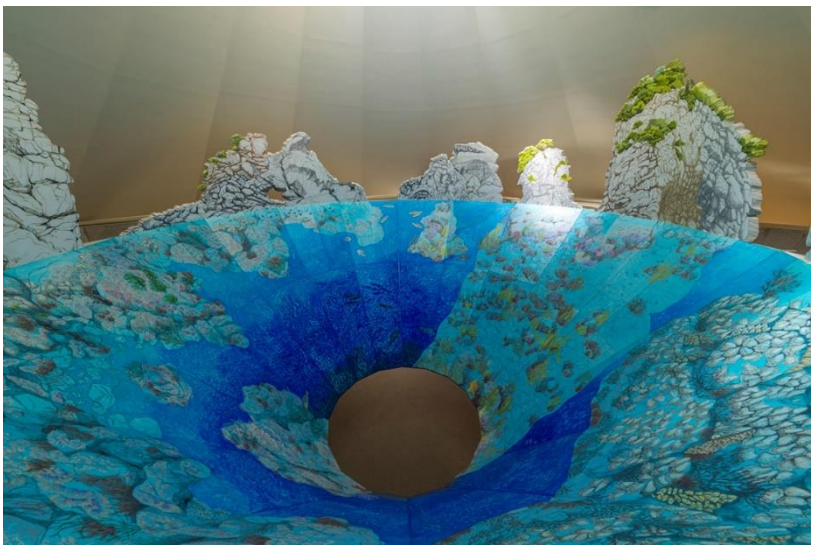
康夏奈｜Kana Kou

1975年 東京都生まれ
2002年 広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科卒業
2006年 アーティスト・イン・レジデンス・プログラム、ロサンゼルス
2020年 2月末 当美術館での展示企画進行中に逝去

山や海へのフィールドワークによる身体経験から醸成された記憶をもとに風景をモティーフとする作品を制作してきた康夏奈。2013年にはＶＯＣＡ展に入選、また瀬戸内国際芸術祭には《花寿波島の秘密》を出展し、話題を集めた。小豆島に移住後は、当地の植物や石などの自然の素材をモティーフに制作してきた。2016年に作家名を吉田夏奈から康夏奈に変更。

一見、「崇高さ」の表現にも映る康の作品であるが、実際には大いなる自然をロールプレイングゲームの主人公＝プレイヤーのように作家が（追）体験するための道具立てに近い。ゆえに作品は鑑賞者にプレイを喚起するものとなる。それはパノラマの固体化ともいうべき、砂漠の植物を模した《コズミックカクタス》にも共通し、また初期の映像作品《SHAKKI -black and white on the lake》においてすでに予見されていた。

本展では上記二つの作品に加え、自然のパノラマ感を感じさせる作品を展示する。



康夏奈《花寿波島の秘密》瀬戸内国際芸術祭2013-2019
photo: Yasushi Ichikawa

康夏奈《Cosmic Young Girl Rafflesia》2016
courtesy of the artist's family and ArtTank
photo: Art Front Gallery

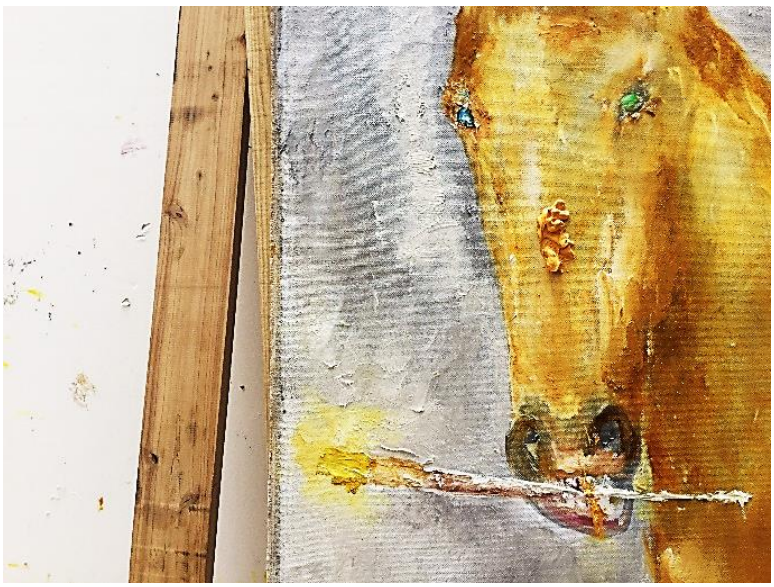
康夏奈《Cosmic Cuctus》2016
courtesy of the artist's family and ArtTank
photo: Art Front Gallery

各作家について

小林正人｜Masato Kobayashi

1957年 東京都生まれ
東京芸術大学美術学部油画専攻卒業
1997年キュレーター ヤン・フート氏に招かれ渡欧

国立、ゲント、鞘の浦へアトリエを移動させながら、木枠、画布、絵を同時に組み立て/解体し、絵画と場所、光の関係性を扱う、いわば「存在論」的な問いを自らに課してきた。1997年にはヤン・フートの招きでベルギー第三の都市ゲントに移住し、彼の代表作の一つ「床置き絵画」が制作された。またこの頃より、小林は周囲の環境、あるいは「この星の…」と彼が表現する、あらゆるものものの関係の全体を「絵の家族」として繋がり合うものと考えるようになった。本展では白い画布を木枠に張ってから何かを描きだすのでは「遅い」という考えに突き動かされ、80年代よりキャンバスを張りながら手で立ち上げるように描いてきた小林の絵画のほか、当館に注ぐ光を生かした展示をする。



上）小林正人《画家の肖像》（部分）2019
下）小林正人 タイトルなし（アーティスツ・ライフ）1996

上）小林正人《この星へ》2009
下）小林正人《Unnamed #18》
2000 東京都現代美術館所蔵

このページに掲載されている写真のクレジットはすべて
copyright the artist. courtesy of ShugoArts.

各作家について

佐々木愛| Ai Sasaki

1976 年 大阪府生まれ
2001年 金沢美術工芸大学美術学部デザイン科視覚デザイン専攻卒業
2010年 ポーラ美術振興財団在外研修生としてオーストラリアに滞在

各地の風景や伝統的な紋様/物語を着想源として、版画や油彩、ドローイングを制作してきた。2010年にはポーラ美術振興財団在外研修生としてオーストラリアに派遣、そのほか海外でレジデンスを経験した。なかでも「あいちトリエンナーレ2016」で制作されたロイヤルアイシングという手法を用いた砂糖による壁画は、佐々木のひとつの代表作である。展示期間を過ぎると、その壁画は壊されるために鑑賞者の記憶のなかだけに生き続けることになる。残り続けることと同時に「忘れられてゆくこと」の心地よさを体現しているかのようだ。本展では、当館にまつわる素材、モティーフを用いて滞在制作した作品を中心に展示する。

佐々木愛《残された物語》2012
「開港都市にいがた 水と土の芸術祭2012」角田山妙光寺、新潟
(2012年7月14日-12月24日) Photo: 山本糾

佐々木愛《残された物語》2012（部分）
「開港都市にいがた 水と土の芸術祭2012」
角田山妙光寺、新潟 (2012年7月14日-12月24日)
Photo: 山本糾

佐々木愛《見つけられた山》2015

佐々木愛《私の扉》2017

各作家について

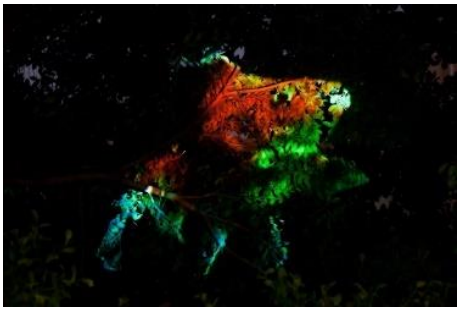
志村信裕| Nobuhiro Shimura

1982年 東京都生まれ
武蔵野美術大学大学院造形研究科映像コース修了
2016-18年　文化庁新進芸術家海外研修制度によりフランスに滞在

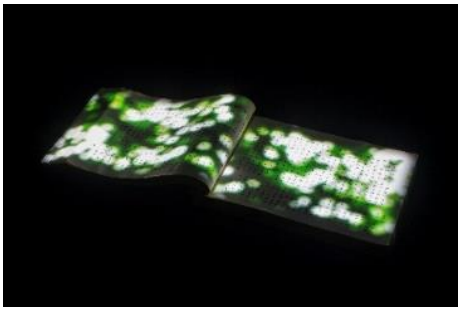
　初期にはスニーカーやボタンなどの実写映像を白いスクリーンではなく身近な場所や日用品に投影し、その空間の性質や集う人々の交流の質に介入する多くはパブリックでサイトスペシフィックな作品を、また2015年の《Japanese Cattle》以降には、フィールドワークを基にした比較的ストレイトなドキュメンタリー映像を制作してきた。一見、両者の方法は異なってはいるものの、ある制度や慣習のなかで忘却されゆく記憶や歴史＝物語を、場所に対する映像の投影、またショットとショットのモンタージュによって、重ね合わせて幻視させる構造は共通している。本展では空間への映像プロジェクション、また各地の廃れゆく羊毛業者を映したドキュメンタリー映像や、当館の空間からインスパイアされた作品を展示する。

志村信裕《Nostalgia, Amnesia》
（Video still）2019

志村信裕《Nostalgia, Amnesia》2019
千葉県立美術館での展示風景
photo: Ken Kato



志村信裕《Goldfish》2010
台北国際芸術村での展示風景
photo: Chang-Chih Chen



志村信裕《光の曝書》2014
千葉県立美術館での展示風景
photo: Ken Kato

このページに掲載されている写真のクレジットはすべて
courtesy of Yuka Tsuruno Gallery

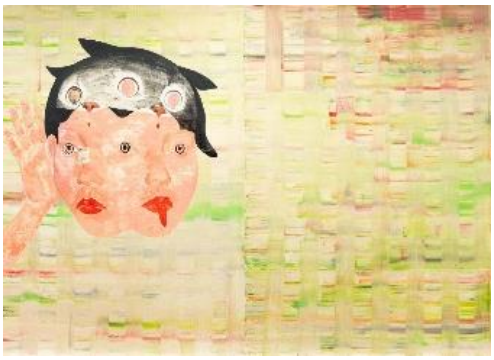
各作家について

山口啓介| Keisuke Yamaguchi

1962年 兵庫県生まれ
武蔵野美術大学卒業

大型の腐食銅版画でデビューし、1992-93年の滞米をきっかけに原子力への関心を高め、95年の渡独後には《原子力発電所》シリーズ、97年には自立式絵画連作「Colony」、花や種子を天然樹脂で固めた「カセットプラント」の制作を開始した。また東日本大震災発生の3日後からは原発に関するニュースを中心に書き写す日記《震災後ノート》が始められ、現在まで記入が続いている。こうした作品制作に並行して、山口はゲーテやベンヤミン、三木成夫らの理論を参考に哲学的論考を多く執筆してきた。本展では生花と造花を用いて、自然と人工を対比させる「カセットプラント」、それらをアナロジカルに結びつける絵画作品を展示する。

山口啓介《花の心臓/蘭、紫の雲》2002
photo: 高嶋清俊



右上）山口啓介《共存する二つの顔、世界》2017-2018
photo: 花田ケンイチ
右中央）山口啓介《薔薇の箱、レストランのためのショウケース》BankART1929 2007
右下）山口啓介《植物の宇宙ー時間　Cassette Plant Workshop in Toyota 2014-15》2015
豊田市美術館での展示風景 photo: 澁谷征司